

史談会五〇周年記念行事に寄せて

真柴茂彦

高木嘉吉会長、事務局長羽柴弘、評議員制の運営で佐伯史談会が発足したのは昭和三三年（一九五八）である。二〇〇八年の今年で五〇年となる。

さかのほれば発足当時は、それまでであった鶴岡郷土史研究会と佐伯史談会の二本立てであったという。機関誌は鶴岡郷土史研究会がだしていた「郷土史研究」があった。両会は会員の重複も多く三九年ごろ自然統合された。史談会の名前は昭和二二年郷土の医師で歴史研究家増村隆也の呼びかけで創設された「佐伯史談会」によるとされるが、この会は数回の会合ののち閉会している。現在の機関紙「佐伯史談」は昭和四〇年の八ページのガリ版刷りよりはじまり現在二〇八号である。

考えてみると一つの自主的な文化団体が最も多い時は会員数およそ四〇〇人、現在でも三〇〇人を超える会員を抱え継続していることは特筆すべきことである。同時

にこれは佐伯市民の郷土の歴史に対する関心の高さをも示している。

そこで歴史ある佐伯史談会の五〇周年にふさわしい行事の中身をどうするか、記念に何をするか、出版物、展示物についての夢のある構想もあり、早い時期に委員会を立ち上げることが必要であった。平成一八年五月二六日、第二回常任評議員会で五〇周年記念事業の検討委員会を発足、六月九日、一二名の検討委員を選出、第一回の会合が持たれた。ここで、1、記念講演と五〇周年式典、2、毛利関係資料、佐伯文庫をふくむ佐伯藩関係を中心にした展示会、3、記念出版等について各委員の意見を聞き集約した。

第二回は七月四日、期日、会場、さらに内容の企画委員会を作り検討を加えてきた。第三回は九月五日、日程、経費、一九年度の進行予定等について話し合われた。

一方、記念行事のため、三役で佐伯市、教育委員会、県振興局等の各長、各課を訪問、協力依頼と助言をお願いした。

一九年度は記念式典、記念講演、郷土史料展示会、記念誌発行の四つの柱で分科会を開き、より具体的な話し

合いを進めた。各部会で構想を具体化し、常任評議委員会、拡大評議委員会等で共通理解をいただきながら、話をすすめた。佐伯文庫、毛利家資料の展示等では、特に展示品の中にこの際、われわれのまだ見たことのない、幕府に寄贈され、国や県に保存されている佐伯文庫の里帰りを実現したいと考えた。その手続きは公からの申し込みが必要であり、佐伯市か佐伯市教育委員会の協力が必要であった。

早速、市と教育委員会に協力を申し込んだ。結果申し込んだ共催の話は市教育委員会との間に比較的早く実現した。また、市の協力も一九九年の年度末には希望通り頂けることが決定した。県振興局にも前向きな検討をいただき、具体的な話は二〇年度にもちこし、書類の提出等をする事となった。

現在、期日は一月二日から三日の日程で展示は文化会館中ホール・旧食堂を会場に、県からの里がえりを含む佐伯文庫、毛利家史料を中心に市教育委員会が、会員が収集できる個人資料を中心に史談会というところで行うことになった。史談会の展示について個人資料等は会員や市民の協力をお願いすることとした。

残念なことに、国会図書館など国にある佐伯文庫は空調設備のある博物館や美術館等の施設があり、専門の学芸員が貸し出し事項に対応できないところには貸し出せないということであったので断念せざるをえなかった。

平成二〇年度になって、佐伯藩の四〇〇年祭の話が持ち上がった。

佐伯藩設立は四〇〇年を過ぎていたので佐伯藩の仕組みがはっきりした開市四〇〇年祭でおこないたいという話になった。

急速にこの話は具体化して、式典、講演会は史談会五〇周年、佐伯藩の開市四〇〇年祭を合同で行い、期日は三余館で一月二日（土）午前中を予定している。

五〇周年記念誌は史談会が行う。費用の関係については佐伯市、県の協力を得て、佐伯のわかりやすい歴史書を出来ればカラー印刷で作りたいと分科会を中心に特に記念誌のための会合を持って構想の具体化、手分けしての執筆等に奔走している。

以上、五〇周年の記念行事の取り組みについて、現在の切り口をお知らせし、展示物、記念誌について会員皆様のご協力を特に切望する次第である。